

「祖母を思い出しながら」

靴販売店勤務

(氏名割愛)

夏の暑さも一段落して、そろそろ街に秋の気配を感じ始めた頃だった。白髪の小柄なおばあちゃんが、ウォーキングシューズのコーナーの前で、あれこれと商品を見ていた。土地柄と高齢化社会も手伝ってか、年配のお客様は多い。私はいつものように「サイズはいろいろ」用意していますので、もしよかったらお試しになりませんか？」と声をかけてみた。すると「今日は、買わねえよ。見てるだけ」と、ピシヤリと返されてしまった。

しかしそう言われて「そうですか」と引き下がるわけにはいかない。「いっえい無理にお勧めなんてしませんから、履き心地だけでもお試しになってみて下さいませ」。私は満面の笑みでこたえた。ふとおばあちゃんの足元を見ると、そろそろ取り替えてもよさそうなほど履き込んだ靴だ。「それじゃ、履くだけ履いてみっかな」どうやら試してくれるようだ。

どんな靴を探しているのか聞くと、今履いているのと同じ靴が欲しいと言う。あいにく同じデザインのものはないが、同じメーカーの商品があった。もしよかったらということ、いくつかお勧めして履いてみてもらった。

しばらくお話をしていると、どうも東北のなまりがあるようで、懐かしさを覚えた。私の祖母もちょうど同じくらいの年代で、山形生まれだった。口調が突っけんどんに聞こえ、いつも怒っているように思われがちだが、とても面倒見の良い優しいおばあちゃんである。いつしか祖母と話している時のように、会話がすつかり私も東北弁になっていた。「これは少し派手でないかい？」おばあちゃんが言うと、「なんもなんも、ハイカラで良いでねえの」と私が答える。そしておばあちゃんはすつかり和んで、おじいちゃんに先立たれてしまったこと、でも今は友だちと旅行したりして、一人で寂しいと思うひまもなく楽しく過ごしていることなどを話してくれた。

気が付くと三〇分以上も話していた。「さて、それじゃ話を聞いてもらって楽しかったから、これもちょうどいいかな」。私が一番お勧めした靴を指しておばあ

やんが言った。会計を済ませ、お見送りしながら私が「ありがとうございました。」  
私も祖母と話しているみたいでとても楽しかったです」と言うと、「最初に買わ  
ねえて言ったのにな」と、ペロツと舌を出し、手を振って帰って行かれた。  
何とも言えない充実感があった。いつもお客様に元気を差し上げようと思って  
いるのだが、この日は私の何倍もの元気をおばあちゃんからもらってしまった。  
そして忙しさにかまけてなかなか会えずにいる祖母に久しぶりに会いたくなっ  
ていた。相変わらずの 突っけんどんで元気にしているだろうか。